

中国における日本文学

——1920, 30 年代の翻訳文学及びその影響を中心に——

田 鳴*

はじめに

「世界の中の日本文学（講演会）シリーズ第一回」にあたりまして、「中国における日本文学」というテーマで語らせていただくことができ、恐縮しつつも、光栄に存じます。

「中国における日本文学」については、いろいろな視点からのアプローチが可能かと思うが、本稿では、中国での日本文学の翻訳、紹介及び研究の史的流れに触れながら、中国の近現代の歴史において、特に文化、文学の転換期 1920, 30 年代ころ、翻訳、研究された日本文学及びその影響を中心に見てみたい。

『二十世紀中国の日本翻訳文学史』⁽¹⁾によれば、中国が近代に入って以降の、日本文学の翻訳、紹介は、およそ次の五つの時期に分けられる。

- (一) 清末民国初期 (1898 ～ 1919 年)
- (二) 1920, 30 年代 (1920 ～ 1936 年)
- (三) 戦争期 (1937 ～ 1949 年)
- (四) 新中国建国後最初の 30 年 (1949 ～ 1978 年)
- (五) 中国改革開放後の時期 (1979 ～ 2000 年)

この百年来、中国で翻訳、出版された日本文学関係の書物は、すでに二千種類以上になっているといわれる。こうした翻訳、紹介された日本文学は、中国の近現代の文学、特に「五・四」⁽²⁾時期の新文学及びそのころの文学論に、さらには、80 年代の改革開放後の中国現代文学の創作に、いずれも大きく影響を及ぼしていると指摘されている。

では、中国の近現代の歴史、特に史的転換期「五・四」時期において、どのような日本文学が、どういう人たちによって翻訳、紹介され、またどのような影響をもたらされたのか。次にそれらを中心に、少し具体的に見てみたいと思う。

*中国外交学院副教授—日本近代文学

一 20 世紀初めの政治小説

近代中国における日本文学の紹介は、明治初期の政治小説の翻訳がその始まりだという。日本の政治小説が当時の中国文壇に新しい文学感覚をもたらし、後の「五四白話文体」を押し進めるのにも大きな役割を果たしたと認められている。次にそれを二つの点から見てみる。

1. 日本の政治小説の翻訳紹介

中国の小説家で、日本の明治維新が果たした役割に、いち早く関心を寄せたのは康有為である。1897 年、康氏は自ら『日本書目志』を刊行した。中に集められた書目の大半は、日本の洋書の翻訳本であり、政治小説も少し入っている。この書目は、当時、小説が日本の書籍の中で、どのように位置づけられていたか、また、国民の知的教養にどれだけ役に立っていたかを示すものでもある。しかも、康氏はそれをすでに認識していたことも物語っている。同時に、康氏は、『日本書目志・識語』の中で、「小説こそ今日の急務である。字が読める人で、経を読まない者はいても、小説を読まない者はない。故に六経を教えるのでなく、小説で以て教えるべし。正史で導くのでなく、小説で以て導くべし。語録で教え諭すのでなく、小説で以て諭すべし。法令で治するのでなく、小説で以て治するべし」というように小説の効用を取りたてて言ったのである。同じ頃、梁啓超は『変法通議・論遊学』において、紅樓（夢）三国（演義）を読む人が六経を読む人より多いという現実から、小説の教育作用をより一層強化しなければならないと唱える。そして、氏は当時の中国の小説について、「誨淫誨盜，不出二者。故天下之風，魚爛于此間」（盗を教え淫を教えるに過ぎない。故に風紀紊乱した世の中になる）と指摘した。このため、日本で仮名表記による文字の通俗化や小説での通俗な言葉の多用によって、だれでもわかりやすく読めるようになった点を大いに学ぶべきだと主張する。また、各種作品の創作、普及によって、聖人による教化から民間の雑学、国恥の激発に異国の事情、さらに官途醜態、鴉片頑疾、纏足虐刑、その有様のすべては皆読むことができ、世の中を奮い起こすのに役立つ。その益は計り知れないものであるとも言ったのである。

上記のような、小説に関する見方及び期待は、梁啓超を代表とする中国清末維新派の人たちが、日本の政治小説を大きく推賞する内的要因だと思われる。1898 年、康有為、梁啓超らが推進した清末の政治改革運動「戊戌の変法」⁽³⁾が失敗し、清の朝廷に指名手配された康、梁は、船で日本に亡命した。船内で梁氏は、東海散士の『佳人の奇遇』をたまたま読んでいた。この小説によって、氏は初めて日本にすでに政治小説があることを知り、示唆を受けると同時に心を強く打たれたのである。まもなく氏は、日本で変法思想の主張を宣伝する目的

で、『清議報』を創刊し、その創刊号に自らの翻訳小説、『佳人の奇遇』を載せ、それに政治小説の社会的意義を語る解説文として、『政治小説「佳人の奇遇」序』（後『訳印政治小説序』と改題）という文章も同時に掲載した。この文章で、梁氏は政治小説の効用について、

在昔欧洲各国变更之始，其魁儒硕学，仁人志士，往往以其身之所经历，及胸中所怀，政治之议论，一寄于小说。…（中略）…往往每一书出，而全国之议论为之一变。彼英，美，德，法，奥，意，日本各国政界之日进，则政治小说为功最高焉。

即ち、昔ヨーロッパ各国の近代化の初頭においては、学者や有識者がいずれも自らの体験及び胸中に抱いた志や政治的議論を以て、小説に訴える。…（中略）…そうした小説が出版されるたびに、国も世論とともに変化がもたらされる。英、米、独、仏、奥太利、日本、各国政界の日々の進歩も、政治小説が果たした役割が最も大きいのである、と高く評価する。

そして、その後に書かれた『飲氷室自由書伝播文明三利器』の中で、日本の政治小説とその役割について、さらに次のように述べたのである。

于日本维新运动有大功者，小说亦其一端也。明治十五六年間，民权自由之声遍满国中。于是西洋小说中，言法国，罗马革命之事者，陆续译出。…（中略）…自是译泰西小说者日新月异……翻译既盛，政治小说之著述亦渐起。如柴东海之《佳人奇遇》，末广铁肠之《花间莺》，《雪中梅》，藤田鸣鹤之《文明东渐史》，矢野龙溪之《经国美谈》等。著书之人，皆一时之大政治家。寄托书中之人物，以写自己之政见。故不得专以小说目之。而其浸润于国民脑质，最效力者，则《经国美谈》，《佳人奇遇》两书为最云。

即ち、日本の維新運動の成功に大いに役立ったものとして、小説もその一つにあげるべきだ。明治 15、16 年間、民権自由の声が日本全土に響き渡って、フランスやローマの革命を語るような西洋小説が次々と翻訳される。…（中略）…これより西洋小説の翻訳が日々盛んになり、それにつれて政治小説の創作も徐々に表れてくる。例えば柴東海の『佳人の奇遇』、末広鉄腸の『花間鶯』、『雪中梅』、藤田鳴鶴の『文明東漸史』、矢野龍溪の『経国美談』等があげられる。作者は皆当時の大政治家であり、作品のいずれも作家の政治的見解を作中人物に託している。このため、普通の小説と見なすべきではない。中で、特に国民の脳にまで浸透するのに最も効果的な作品として、『経国美談』と『佳人の奇遇』があげられる、と。

梁啓超訳の『佳人の奇遇』に続いて、『経国美談』が周達により、同じ『清議報』に翻訳発表される。その影響の下で、20 世紀の初め、中国では、日本の政治小説の代表作として、柴四郎の『東洋佳人』、大橋乙羽の『累卵東洋』、矢野文雄の『極楽世界』、佐々木龍の『政海波瀾』、末広鉄腸の『花間鶯』、『雪中梅』、横井時政の『模範町村』など、十数冊余りが単行本として翻訳、出版されたのである。

2. 日本の政治小説の反響と影響

翻訳、紹介された日本の政治小説のうち、『佳人の奇遇』、『経国美談』、『雪中梅』の三作が最も代表的な作品として受け入れられたという。これは、三作品の中に表された思想内容の基本、一つは「民権」の要求、即ち西洋式の立憲君主制の自由民主を実行すること。もう一つは、「国権」の主張で、西洋列強を手本に日本がアジアにおける強国になることである。この二点は、中国の近代改良思潮と図らずも一致したからである。それに、表現上でも、日本の政治小説は中国古典の才子佳人のようなパターンか、中国歴史演義小説のようなパターンかが用いられたため、中国人読者も親しみやすい。その上、日本の政治小説は、作者のほとんどが漢文の造詣も深く、漢文調の文体に漢詩や辞賦も多く混じっているため、広く読まれたのである。そうして日本の政治小説は、大きな反響も呼び起こしたという。当時、中国の作家や有名人の多くは、主要な刊行物で、日本の政治小説を評価し推賞した文章を次々と発表していた。

翻訳、紹介された日本の政治小説は、反響と同時に、当然中国の近代文学に大きな影響も与えたのである。これについては次の三点において見られよう。

一点目は、日本の政治小説によって中国の文学伝統が打破され、新しい文学感覚として、政治性、社会性の強い文学観がもたらされたことである。この文学観の下で、政治小説の創作が唱えられ、創られるようになったため、政治小説は新しい題材、しかも中国近代文学での重要な類型の一つとして登場したのである。そして、中国のそうした政治小説の作品に、日本の政治小説の影響が明らかに見られ、その例として、梁啓超が発表した『新中国未来記』⁽⁴⁾がよくあげられる。作品は、冒頭いきなり、1962年に中国全国で維新勝利60周年を祝う大会が開かれている場面からスタートする。この倒置的な叙述は、いうまでもなく『雪中梅』にヒントを受けたと指摘されている。また、当時、日本の政治小説を翻案して、その他の文学様式に作り直した例も挙げられる。例えば、中国近代の作家李伯元が『経国美談』の中国語訳によって、脚本『前本経国美談新戯』⁽⁵⁾に翻案したものがある。

二点目は、梁啓超が試みた「新文体」の広がりであり、それが後の「五四白話文体」（現代中国語の文体）にもつながっていくことがあげられる。これに関して、劉建輝氏の研究によれば⁽⁶⁾、梁氏が『佳人の奇遇』を翻訳した時点から、すでに「原文の簡明な読み下し文式の漢文調文体を、ほとんど修飾を加えず、そのまま中国語に訳しているが、それが期せずして古文と白話の中間的な文体になっているのである。おそらく、まさにこの‘半文半白’の翻訳文体に‘俚語、韻語’さらには‘外国語法’を加えることによって、彼はその‘新文体’を作り上げたのであろう」⁽⁷⁾という。そして、日本の政治小説の翻訳が盛んに行われている中、梁氏のこの「新文体」も広く用いられていったのである。周知のように、この「新文体」は、その後の「五四運動」を経て、改良されつつ、のちの「五四白話文体」につながって発展していくのである。

三点目は、日本の政治小説の翻訳をきっかけに、それを自ら創作するようになったことである。更にそれにつられて、日本のその他の題材の小説、例えば科学小説、冒険小説、探偵小説、軍事小説なども同時に、新しいタイプの作品として広く盛んに翻訳されたこともあげられよう。

二 「五・四」時期の新文学

「五四」前後は、20世紀の中国文学にとっての転換期であり、中国における日本文学にとっても転換期であると言われている。前にも触れたように、「五四」以前は、中国での日本文学の書物は、むしろ維新政治の宣伝や国民の政治意識の啓発といった功利的且つ実的な目的から、翻訳、紹介されたのがほとんどである。そのため、政治小説が大量に翻訳紹介される一方、日本の科学小説、探偵、冒険小説や軍事小説の翻訳によって、国民の教養の向上をはかり、国民に近代西洋の科学知識、近代法律、司法制度、近代教育、軍事知識などを宣伝するのに大いに役立てようとしたのである。

しかし、1918年、周作人が北京大学で『日本近代三十年小説之発達』をテーマにして行った講演によって、日本文学は中国の文壇に嘗てない影響を及ぼすことになった。この講演では、日本の明治維新後30年間の文学の流れや展開について詳細にまとめられている。中でも特に、「写実主義」を唱えた坪内逍遙の文学及びその文学論『小説神髓』、二葉亭四迷の『浮雲』、尾崎紅葉ら「硯友社」の文学、北村透谷の「主情的」「理想」の文学、国木田独歩らの自然主義文学、漱石と鷗外の文学、永井荷風、谷崎潤一郎の耽美文学、白樺派の理想主義文学などについて詳細に述べられていた。この講演によってまとめられた論文が同年、『新青年』⁽⁸⁾ 雑誌に掲載⁽⁹⁾ されて、中国の文学界に反響を呼ぶとともに大きな影響を与えたものと見られる。

これまでの中国文壇では、ヨーロッパ文学に関しては、文学史や概説を、翻訳、紹介したものがいろいろあったが、そのほとんどはヨーロッパ古来の文学の史的展開を中心にしたものである。それよりも、歴史的転換期に西洋文学を受容しながら発生した日本の明治以後の文学の方が、同じく歴史の節目にある20世紀初めの中国近代文学には、より一層現実的な意味をもってくるであろう。また、前掲の言及でもわかるように、周氏の文章は、真の意味での日本文学に、初めて、しかも研究の視点から触れており、先駆的な論として高く評価される。以後、30年代ころまで、日本の明治から大正時代にかけて登場する文学思潮及び流派の代表作家の代表作をはじめ、小説、詩歌、戯曲、文学論、脚本、民話及び児童文学など、各種文学ジャンルのさまざまな作品が翻訳、紹介、研究されたのである。

統計⁽¹⁰⁾によれば、この時期に出版された日本文学の翻訳作品の単行本は（雑誌掲載の翻訳作品は含まず、再版を含む）、270余種類、このうち文学論関係は110余、文学作品は160

余である。そのうち作家別作品集は約 40 種、中長編単行本も約 40 種類という。日本文学が当時いかに盛んに紹介され、また広く読まれていたか、この数字からもうかがえるであろう。

日本文学が盛んに翻訳、紹介されたこの時期において、特に先駆的な存在と考えられる周氏兄弟の、五四時期、即ち 1920 年代ごろの翻訳、紹介によって注目された、武者小路実篤文学及びその影響について、次に少し見てみたい。

周作人は、『日本近代三十年小説之発達』の発表に先立って、1912 年から 1915 年にかけて、雑誌「白樺」の予約購読をずっとしており、その後も日本の白樺派関係の刊行物を常に購読していたという。そして、当時、魯迅とともに白樺派の作品をはじめ、その文学観や理念を紹介したのである。1918 年、周作人は武者小路実篤の『或る青年の夢』（「白樺」1916 年 11 月まで六回）を読んで、「読武者小路君『一個青年的夢』」（「武者小路君『或る青年の夢』を読む」⁽¹¹⁾）を『新青年』に発表、その文章の中で、氏は作品内容を詳細に説明し、特にそこに表された断固とした反戦の態度や、平和を求めるヒューマンな精神を称えた。魯迅は周作人の文章を読んで、武者小路及び『ある青年の夢』に興味を持ち、「捜し求めて読んでみた。かなり心を打たれた。思想は透徹し、自信も強く持ち、声も真心からのものである」（魯迅『ある青年の夢・訳者序』）と述べている。氏はこれを翻訳することにし、1918 年 8 月より、北京の『民国公報』に連載し始める。そのうち、同報が発禁とされ、連載も中止したが、同年の 11 月、魯迅は『新青年』雑誌の要請に応じ、残りの部分を翻訳し、すでに訳した前の部分とともに校訂して、四回にわけて『新青年』雑誌に掲載した。そして、氏は『訳者序二』において、この本を翻訳する目的について、そのヒューマニズムへの共鳴によること、また、「中国の旧思想にある痼疾の多くを癒すこともできる」と語っている。こうして見ると、氏の『ある青年の夢』の翻訳は、まず中国の読者の自省を促しているが、同時に、五四時期の魯迅文学の啓蒙思想を反映していることがうかがえよう。さらに、五四時期の中国の時代精神も反映していると思われる。五四運動は、まず帝国主義反対、封建主義反対の民主主義運動である。帝国主義反対とは、帝国主義が中国への侵略と略奪を行うことに反対するのであり、帝国主義を支持する国内軍閥の混戦に反対するものであった。この意味において、中国の 1920 年代前半に現れてきた「非戦文学」「反戦文学」の多くは、魯迅が翻訳した『ある青年の夢』の影響によるところが大きかったと認められている。

一方、魯迅によって翻訳された『ある青年の夢』の脚本第二幕が、『新青年』7 卷 3 号に掲載された時、武者小路実篤が専らそのために書いて寄こした「支那未知の友人へ」という手紙文、また「ある支那兄弟へ」という実篤の詩歌の部分翻訳を取り入れた周作人の「訳者附記」、さらに当時の北京大学学長蔡元培及び文科学長陳独秀のそれぞれの「附記」も同号に掲載された。そして、蔡元培の「附記」が 20 年代の初め、『日本武者先生の手紙に題して』とのタイトルで『中学国語読本』第二冊（商務印書館）に収録された⁽¹²⁾。また、『ある青年の夢』の主要語句を取り出して『中国語法講義』の例文に用いられた⁽¹³⁾ こともあり、実篤の「支那未知の友人へ」も『初級中学国語読本』に採録された⁽¹⁴⁾。1930 年代に入っても、『あ

る青年の夢』は引き続き話題となっており、当時の復旦大学中国文学学部主任の孫俚工が上記作品を基に『続ある青年の夢』という翻案劇を作って、大反響を呼んだ。1936年、実篤はヨーロッパ外遊のついでに上海へ寄り、魯迅と逢い、「中国では、いまでも『ある青年の夢』を読んでいる人がいる」という魯迅の話に感動し、この気持ちを回想文『ある男』や随筆『湖畔の画商』で述べている。1940年代中ごろでも、実篤のこの作品は依然として愛読されていた。

周氏兄弟による武者小路の作品の翻訳に続いて、その後、実篤の作品集『人間の生活』が毛咏棠、李宗武両氏により訳された。周作人は同書に序を書き、序の解題で、同作品には「新しい村の理想及び平和精神」が述べられていると高く評価した。この作品集は1922年1月最初に出版されたが、1932年8月には10刷にまで達していた。これも前掲の『ある青年の夢』と同様、中国の五・四運動直後に翻訳出版されたものである。周知のとおり、中国歴史上の五・四運動は、反帝国反封建運動であり、社会の解放を目指しながら、「自我の目覚め」「人間の解放」「個性の伸張」を核心とする運動であった。『人間の生活』に示された新しい村への憧れや人間肯定の精神のような主題は、まさに中国の五・四時代の時代精神にも一致しているものであり、その戦争反対、平和的に共同发展をめざす世界大同の精神は、戦乱にうちひしがれている当時の中国の知識人が追い求めている理想の境地でもあったことは言うまでもないであろう。

見てきたように、1920、30年代において、武者小路実篤をはじめ、白樺派の作家たちの代表作品は、周氏兄弟により、いち早く中国に翻訳紹介され、以後大量に翻訳出版されたのである。本稿において史的転換期の中国の新文学に、日本の政治小説と白樺派の文学が、どれほど影響を及ぼしていたか、多少とも垣間見ることが出来たとしたら幸いである。

「注釈」

- (1) 王向遠『二十世紀中国の日本翻訳文学史』北京師範大学出版社、2001年 1～7頁
- (2) 第一次世界大戦後、パリ平和会議における山東問題の措置に憤慨した北京の学生は、1919年5月4日、全市にわたってデモを行い、政府に対して平和条約批准の拒否、責任者の処罰を要求した。これに端を発して全国的な反帝反封建運動に発展したのが「五四運動」である。それにこの五四運動を中心に、儒教的、封建的な旧制度、旧文化に反対し、民主主義と科学精神とを標榜する新文化の樹立、社会の近代化を推進することを旨とする文化運動も展開される。この新文化運動と同時に唱えられた進歩的な白話文体の文学のことを「新文学」という。(『百科事典 マイペディア 電子辞書版 日立システムアンドサービス 2005』)
- (3) 「戊戌の変法」：中国清末の1898年(光緒24年、戊戌の年)に、光緒帝は変法自強を説く康有為、梁啓超らを登用して、清朝を立憲君主国家にしようとする新政を実施したが、西太后を中心とする守旧派は先手をとってクーデタを起こし、帝は幽閉され、康有為、梁啓超らは日本へ亡命した。西太后を摂政

- として守旧派は政権を把握，新政は 100 日たらずで失敗した。（『百科事典 マイペディア 電子辞書版 日立システムアンドサービス 2005』）
- (4) 梁啓超『新中国未来記』『新小説』創刊号掲載 新小説社（横浜）1902 年 11 月。
- (5) 李伯元『前本経国美談新戯』『世界繁華報』掲載 世界繁華報館（上海）1901 年 10 月。後に『綉像小説』商務印書館 1903～1904 年。
- (6) 劉建輝『中国近代文学における日本文学の功罪 —— その紹介方法と影響を中心に』『日本学研究』第 5 期 北京日本学研究中心 1996 年。
- (7) 同注(6) 32 頁。
- (8) 『新青年』：陳独秀の主編による，1915～1921 年上海で発行された新文化運動の雑誌；民主と科学を提唱した。第一巻は「青年雑誌」と称した。（『中日大辞典』増訂第二版 愛知大学中日大辞典編集部編 大修館書店 1987 年）
- (9) 周作人『日本近代三十年小説之発達』『新青年』5 卷 1 月号 陳独秀主編 1918 年 7 月。
- (10) 同注(1) 53 頁。
- (11) 周作人「読武者小路君『一個青年的夢』」『新青年』4 卷 5 月号 陳独秀主編 1918 年 5 月。
- (12) 董炳月『夢と夢の間—中国新文学作家と武者小路実篤の相遇』『魯迅研究月刊』2003 年 2 月。
- (13) 同注 12 110 頁。
- (14) 同注 12 110 頁。

参考文献

- 『二十世紀中国の日本翻訳文学史』王向遠著 北京師範大学出版社 2001 年，1～7 頁。
- 『世界各国文学在中国翻訳紹介及研究史論述』王向遠著 江西教育出版社 2001 年 10 月。
- 『日本文学翻訳論文集』北京日本学研究中心文学研究室編 人民文学出版社 2004 年 2 月。

注記 本稿は，2006 年 10 月 4 日，中部大学人文学部に於いて行われた講演「世界の中の日本文学」をもとに，著者によってまとめられたものである。

日本語日本文化学科 杉本和弘

（2007 年 10 月 30 日 受理）